

大学生のTwitter利用と自己隠蔽傾向との関係

一 円 禎 紀

The relationship between Twitter use and self-concealment in Japanese university students

Yoshinori ICHIYEN

【要 旨】 The aim of this study was to investigate how university students' frequency of Twitter use and level of self-concealment affect their behavior on Twitter. By analyzing 79 university students, we determined that people who engaged in a high level of self-concealment often presented subjective physical symptoms. These people perceived Twitter as an extraordinary space where they felt liberated from real life. We found that people who showed a high level of self-concealment and frequently used Twitter often engaged in consummatory communication, appearing to enjoy the very act of chatting. Many of their tweets were negative and very few of their tweets were positive. These people may have felt comparatively greater freedom on Twitter to express the negative thoughts that they tended to suppress in real situations. It is suggested that this behavior may be an attempt to reduce stress.

Key words: Twitter, self-concealment, subjective physical symptoms, university students.

問 題

総務省（2011）によると、2004年以降さまざまなSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）がサービスを開始し、年々拡大している。ICT総研（2014）の調査では、日本における2014年のSNS利用者は6023万人に達している。中でもTwitter（ツイッター）はインターネットユーザーの42%が利用しており、SNSの中ではLINEの47%に次いで利用率が高い。利用頻度の調査でも、Twitter、LINE、Facebook（フェイスブック）は利用者の半数以上が「ほぼ毎日」または「1週間に数回」と回答している（ICT総研、2013）。

本研究ではSNSの中でもTwitter利用者を対象とする。Twitterとはインターネットを通じて140字以内の「つぶやき」を不特定多数にリアルタイムに発信し、自分で選択した他人の「つぶやき」を受信するサービスである（津田、2009）。2006年7月に米国のObvious社（現Twitter社）によって開始され、日本語版のサービスは2008年から始まっている。Twitterは140文字以内という制限があることによってコンテン

ツの効率が高められることや、相手からの承認が不要で、送信対象をフォローすることによって簡単に関係を形成できることなどが特徴である（金・三友、2011）。その結果、友人や知人とのコミュニケーションだけでなく、不特定多数への情報発信が可能であったり、リアルタイムで会話ができたりなど、ブログやチャットの要素も併せ持っており、ほかのSNSとは違った「ゆるいつながりと空気感」が生じていると考えられる（津田、2009）。

このため、利用目的や利用の仕方にも違いが見られる。樋口・河野（2012）の調査では、Facebookやmixi（ミクシィ）は現実での関係がある友人とのコミュニケーションが多く、Twitterは情報収集やインターネット上での友人との交流が多いことが示唆された。MMD研究所（2014）の調査でも、LINEが友人や家族との連絡手段に多く用いられ、Facebookが連絡手段とともに近況報告にも多く用いられるのに対して、Twitterは情報収集に利用されることが多いことが明らかになった。同様に、海原（2011）のTwitter利用

者に対する調査でも「いろいろな情報を得たい」が最も多く、次に「自分の気持ちを表現したい」であったが、実際のつぶやく内容については「自分の気持ちや身の回りのこと」が最も多かった。石井（2011）もまた、Facebookやmixiでは既知の友人との交流が多く、個人情報の開示度が高いのに対して、Twitterでは既知の友人が少なく個人情報の開示度も低いという調査結果を示している。つまり、Twitterは情報を得る目的とともに、現実の対人関係と結びつかない相手に自分の気持ちを発信することで匿名的な交流を楽しんでいる人が多いと考えられる。

しかし、Twitterを頻繁に使う利用者の特徴について検討した研究は非常に少ない。柏原（2011）は、「交流／自己表現動機」「既存関係維持動機」「実況／情報探索動機」「気晴らし動機」が利用頻度と相関関係にあることを見いだした。一方、金・三友（2011）では、Twitterの利用によって人間関係を深くしたり、新たな人間関係を広げたりするような、実質的な人間関係の変化に与える影響は限られていることを明らかにした。

SNS利用とパーソナリティとの関連についての研究はさらに少ない。尾上（2007）は女子学生を対象にして、日常生活における情報伝達ツールの使用と自己隠蔽の程度についての調査を行った。その結果、自己隠蔽傾向の高い人ほどmixiなどのSNS利用時間が長いことが明らかになった。自己隠蔽傾向とは「否定的もしくは嫌悪的と感じられる個人的な情報を他者から積極的に隠蔽する傾向」と定義される（河野，2000）。河野（2000）は自己隠蔽傾向と自覚的身体症状との関連を検討し、自己隠蔽傾向が高いほど自覚的身体症状も多く、主観的な健康度が低いことを明らかにした。

これらの関連から、自己隠蔽傾向が高くて日常の現実の関係において自己開示を抑制しやすい人ほどストレスによる身体症状を自覚して健康状態に問題を感じやすく、その対処方法の1つとしてSNSを利用し、安定を得ようとしている可能性が推測される。佐藤・日比野・吉田（2010）はコンピュータを介したコミュニケーション（computer-mediated communication）において攻撃性が促進されることを確かめている。このため、Twitterなどの匿名性が保たれた状況で攻撃的な自己表現を行うことがストレスの軽減につながる可能性が考えられる。特に、自己隠蔽傾向が高い人にとっては現実場面とは違った非日常的な場であるからこそ、否定的な情報も開示しやすくなることが推測される。

一方、Berson, Berson & Ferron（2002）はオンライ

ンのコミュニケーションが自己コントロールの訓練になり、他者の考えや視点に対する受容性や、ものごとを論理的に見る力を高める効果をもつと報告している。Twitterに関しては、海原（2011）の調査において、140字の字数制限があることで頭を整理したり感情を見直したり、自分と向き合う時間が作れるという回答が多かったことが報告されている。

しかし、自己隠蔽傾向の高い人が実際にSNSをどのように利用しているかについては研究されていない。しかも、尾上（2007）の調査ではmixiの利用者が多く、Twitter利用者はまだほとんど含まれていなかったことが推測される。上記のように、Twitterはインターネット上だけの関係である匿名性を保つことができる相手に自分の気持ちを発信することを目的として利用することができる。つまり、海原（2011）の言う字数制限の利点だけでなく、日常で否定的な思いを隠そうとしやすい人々も自分の率直な思いを表現しやすいツールとして、ストレス対処にTwitterを利用している可能性が考えられる。

そこで、本研究では大学生のTwitterの利用行動と自己隠蔽傾向、自覚的身体症状との関連を検討し、自己隠蔽傾向が高くTwitterの利用頻度が高い人の利用行動の特徴を明らかにすることを目的とする。

方 法

調査対象者

Twitterを利用している大学生79名（男性24名、女性55名）。平均年齢は19.3歳であった。

手続き

大学の授業時間内に、集団配布・集団回収による無記名式の質問紙調査を実施した。調査時期は2013年7月上旬であった。

質問紙構成

対象者の属性 年齢、性別を書かせた。

自己隠蔽傾向 Larson & Chastain（1990）によって開発された自己隠蔽尺度（Self-Concealment Scale）をもとに、河野（2000）により日本人への適用性を考慮して作成された12項目からなる日本語版自己隠蔽尺度を使用し、5件法で回答を求めた。

自覚的身体症状 ストレス性の身体症状を尋ねる質問として、河野（2000）で用いられた17項目を使用した。これは、越河・藤井（1987）による「蓄積疲労候調査」を朝倉（1991）が簡略化して用いた18項目のうち、必ずしも身体症状といえず、自己隠蔽項

目と意味的に抵触する可能性が予想される1項目（「心配ごとが多い」）を除いたもので、2件法で回答を求めた。

Twitter行動 Twitterに投稿する頻度を書かせた。また、藤・吉田（2009）がインターネット上の行動の具体的内容を分析するために作成したインターネット行動尺度のうち、他者との関係に関する行動の中で「悪口を言いやすい」「言葉で相手を傷つけやすい」などの項目を含む「攻撃的言動」の3項目と、現実とのバランスに関する行動の中で「日常生活での嫌なことを忘れられる」「日常生活でのストレスを解消できる」などの項目を含む「非日常的関与」の3項目を、Twitterに関する質問に修正して5件法で回答を求めた。

Twitterでのコミュニケーション内容 古谷・坂田（2006）が友人とのコミュニケーションの内容を測定するために作成したコミュニケーション尺度を用いた。これは、「問題解決のためのアドバイスや情報を伝えてもらうこと」「自分の能力や適性について客観的な情報を交換すること」などの項目を含む「課題的コミュニケーション」の3項目、「そのときの自分の気持ちを理解してもらうこと」「励ましてもらうこと」などの項目を含む「情緒的コミュニケーション」の3項目、「おしゃべりをする」「今何をしているのかといった現状報告」などの項目を含む「コンサマトリー的コ

ミュニケーション」の3項目からなるもので、Twitter上でどの程度行うかについて5件法で回答を求めた。

Twitter発言の自由記述 Twitterに実際に投稿した発言内容について、携帯電話を見ながら最新の発言から順に15回分をそのまま記述させた。

結 果

Twitter利用頻度・自己隠蔽傾向・自覚的身体症状の関係

Twitter利用頻度・自己隠蔽傾向・自覚的身体症状それぞれの相関係数を算出したところ、表1のように、自己隠蔽傾向と自覚的身体症状との間だけに有意な正の相関がみられた（ $r=.49, p<.01$ ）。これより、自己隠蔽傾向が高いほど自覚的身体症状も高いことが確認された。一方、Twitter利用頻度との間の相関は有意ではなかった。

次に、調査対象者をTwitter利用頻度の平均値で高群と低群に分け、自己隠蔽尺度の平均値でも高群と低群に分けた。これにより、Twitter利用頻度の高低と自己隠蔽傾向の高低を組み合わせて、調査対象者を4群に群分けした。対象者の内訳を表2に示した。以下に、4群間での比較を行った結果を述べる。

Twitter行動に関する分析

Twitter行動の「攻撃的言動」について、4群それぞれの得点の平均値を算出したものを表3に示した。

表1 Twitter利用頻度，自己隠蔽傾向，自覚的身体症状の相関

	自己隠蔽傾向	自覚的身体症状
Twitter利用頻度	.13	.07
自己隠蔽傾向		.49**

注：** $p<.01$

表2 4群の調査対象者の内訳

		Twitter利用頻度高群			Twitter利用頻度低群		
		度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差
自己隠蔽傾向高群	Twitter利用頻度	25	25.05	54.20	17	0.69	0.83
	自己隠蔽傾向		46.40	4.82		45.65	5.31
自己隠蔽傾向低群	Twitter利用頻度	15	21.94	33.85	22	0.99	0.89
	自己隠蔽傾向		30.20	7.44		27.14	6.27

注：Twitter利用頻度は1日の投稿回数

表3 攻撃的言動に関する4群の平均値

	Twitter利用頻度高群			Twitter利用頻度低群		
	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差
自己隠蔽傾向高群	25	3.21	1.17	17	2.43	1.08
自己隠蔽傾向低群	15	2.76	0.84	22	2.52	0.87

Twitter利用頻度と自己隠蔽傾向を要因とする2要因の分散分析を行ったところ、Twitter利用頻度の主効果が認められた ($F(1,75)=4.62, p<.05$)。つまり、Twitter利用頻度高群は低群よりも攻撃的言動を行う傾向が高いことが明らかになった。

「非日常的関与」についても、4群それぞれの得点の平均値を算出し、表4に示した。2要因の分散分析を行ったところ、自己隠蔽傾向の主効果が認められた ($F(1,75)=6.80, p<.05$)。つまり、自己隠蔽傾向高群は低群よりも非日常的空間としてのTwitter上で現実生活からの開放感を得る行動を行う傾向が高いことが明らかになった。

コミュニケーション内容に関する分析

3種類のコミュニケーション内容について、4群それぞれの得点の平均値を算出したものを表5に示した。Twitter利用頻度と自己隠蔽傾向、コミュニケーション内容（課題的・情緒的・コンサマトリー的）を要因とする3要因混合計画の分散分析を行ったところ、利用頻度の主効果が認められた ($F(1,75)=10.30, p<.01$)。つまり、Twitter利用頻度高群は利用頻度低群よりもどの内容のコミュニケーションも行う傾向が高いことが明らかになった。また、コミュニケーション内容の主効果も認められた ($F(2,150)=54.55, p<.01$)。多重比較の結果、「コンサマトリー的コミュニケーション」が他のコミュニケーション内容よりも有意に高いことが明らかになった。

表5の分散分析の結果、3要因の交互作用も認められた ($F(2,150)=8.03, p<.01$)。単純効果の検定による主な結果として、自己隠蔽傾向高群の中では「コンサマトリー的コミュニケーション」に関してTwitter利用頻度の主効果が認められた ($F(1,255)=16.73, p<.01$)。また、自己隠蔽傾向低群の中では利用頻度の主効果が、「課題的コミュニケーション」に関して有意であり ($F(1,225)=5.64, p<.05$)、「情緒的コミュニケーション」に関しては有意な傾向がみられた ($F(1,225)=3.69, p<.10$)。つまり、自己隠蔽傾向高群の中では利用頻度の高群が低群よりもコンサマトリー的コミュニケーションを行うことが多いが、自己隠蔽傾向低群の中では利用頻度の高群が低群よりも課題的コミュニケーションや情緒的コミュニケーションを行うことが多い可能性があることが明らかになった。

Twitter発言に関する分析

Twitterに実際に投稿した発言内容の記述については、調査対象者79名のうち69名から全部で903の発言が収集された。それらを対象者に関係なくばらばらにして、内容が似ている発言を集めてグループ化したところ、18のグループが生成された。さらに、それらを似ているグループ同士で集め、7つのカテゴリーに集約した。各カテゴリーに属するグループとその発言数を表6に示した。生成されたカテゴリーの定義（分類の条件）は次の通りである。

表4 非日常的関与に関する4群の平均値

	Twitter利用頻度高群			Twitter利用頻度低群		
	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差
自己隠蔽傾向高群	25	2.93	1.02	17	2.69	0.79
自己隠蔽傾向低群	15	2.29	0.94	22	2.20	0.89

表5 コミュニケーション内容に関する各条件の平均値

		Twitter利用頻度高群		Twitter利用頻度低群	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
自己隠蔽傾向高群	課題的	3.09	1.03	2.61	1.09
	情緒的	3.05	1.15	2.63	1.08
	コンサマトリー的	4.29	0.78	2.98	1.23
自己隠蔽傾向低群	課題的	3.11	0.88	2.35	0.82
	情緒的	3.22	1.02	2.61	0.83
	コンサマトリー的	3.96	0.93	3.85	0.67

表6 Twitter発言内容のカテゴリー・グループ名と発言数

カテゴリー・グループ名	発言数
自分に関する肯定的発言	
自分に関する肯定的発言	33
自分以外に関する肯定的発言	
知人に関する肯定的発言	57
知人ではない人に関する肯定的発言	17
事物や状況に関する肯定的発言	79
対象が不明な肯定的発言	34
自分に関する否定的発言	
自分の言動に関する否定的発言	57
自分の身体に関する否定的発言	34
自分以外に関する否定的発言	
知人に関する否定的発言	14
知人ではない人に関する否定的発言	20
事物や状況に関する否定的発言	88
対象が不明な否定的発言	76
自分に関する中立的報告	
自分の状況に関する中立的報告	124
自分の考えに関する中立的報告	44
自分以外に関する中立的報告	
自分以外の状況に関する中立的報告	55
その他	
疑問や依頼の発言	31
挨拶のみの発言	12
友人への冗談半分のからかい発言	7
分類不能の発言	121
合計	903

自分に関する肯定的発言 自分自身を肯定的に評価した発言や、自分の言動に対する充実感や心地よさを表す発言など。「いろいろ挑戦したい」や「今日もがんばろう」など、前向きな姿勢が表現されているものも含めた。

自分以外に関する肯定的発言 自分以外の人や事物に対する肯定的な思いを表現した発言。「うれしすぎ」「楽しかった」など対象が書かれていないものや、書かれていても何を意味するのか判別できないが、肯定的な評価は明確になされていると考えられる発言もここに含めた。また、友人への感謝やねぎらい、励まし、祝い、気遣いなどの表現や謝罪なども、肯定的な気持ちが表現されていると考えてこのカテゴリーに分類した。さらに、「先輩がいないと寂しい」「会いたい」なども同じように考えてこれに含めた。

自分に関する否定的発言 自分の能力・性格・行動に関する否定的な発言や、したいけどできない思い、頭痛・不眠などの身体的な苦痛など。眠気や空腹など

は何らかの否定的なニュアンスが表現されているものはこちらに含めたが、単に状況を表していると考えられるものは後述の「自分に関する中立的報告」に含めた。

自分以外に関する否定的発言 自分以外の人や事物に関する否定的な思いを表現した発言。授業やレポートがわからないという発言もこちらに分類した。対象が書かれていないものや、書かれていても何を意味するか判別できないが、否定的な評価は明確になされていると考えられる発言もここに含めた。一方、友人や知人へのからかいやツッコミのような発言は、必ずしも否定的な意味合いが含まれているとは言えず、肯定・否定などの判断も難しいと考え、後述の「その他」に分類した。

自分に関する中立的報告 自分の今の状況や考えなどを肯定も否定も含めずに報告するような発言。「どっちにしようか」といった迷いの発言なども、否定的な感情などが表現されず、そのときの考えがそのまま報告されているような場合はここに含めた。また、眠気、空腹、疲労なども特に否定的なニュアンスが表現されずに状況だけが語られる場合はこちらに分類した。

自分以外に関する中立的報告 自分以外の人や事物に関して肯定も否定もせず、単に状況を報告するような発言。やはり、状況から肯定的、あるいは否定的な思いが想像される場合も、そうした思いが発言に直接表現されていないものや、思いよりも状況報告に重点が置かれていると考えられる場合はこちらに分類した。

その他 情報収集を意図したような発言や何らかの疑問、依頼を述べたもの、単に挨拶だけを述べたものなどは、発言数も少なかったので1つにまとめた。また、肯定・否定の判断が難しい友人や知人へのからかい発言や、発言の意味自体を理解するのが難しく分類できなかったものも、すべてこちらに含めた。

次に、これらのカテゴリーのうち、「その他」をのぞいた6カテゴリーの732の発言を、調査対象者によってTwitter利用頻度と自己隠蔽傾向の4群にさらに分類し、集計して表7に示した。4群の合計では、「自分以外に関する肯定的発言」「自分以外に関する否定的発言」「自分に関する中立的報告」が多かった。つまり、自分に関する発言は中立的な報告が多く、自分以外に関する発言は何らかの評価を含んだ内容が多いことが明らかになった。

また、4群×6カテゴリーについてのカイ二乗検定の結果、発言数の割合に有意な差がみられた($\chi^2(15) = 40.83, p < .01$)。残差分析を行った結果、Twitter利用頻度が高く自己隠蔽傾向も高い群では

表7 4群別にみたTwitter発言内容カテゴリーごとの発言数とその割合

		肯定的自分	肯定的自分以外	否定的自分	否定的自分以外	中立的自分	中立的自分以外	合 計
Twitter利用 頻度高群	度数	13	53	44	99	66	18	293
	自己隠蔽 %	4.44	18.09	15.02	33.79	22.53	6.14	100
	傾向高群 期待度数	13.21	74.85	36.43	79.25	67.25	22.02	293
	調整済み残差	-0.08	-3.78**	1.73 ⁺	3.35**	-0.22	-1.15	
	度数	8	30	17	33	39	9	136
	自己隠蔽 %	5.88	22.06	12.50	24.26	28.68	6.62	100
	傾向低群 期待度数	6.13	34.74	16.91	36.79	31.21	10.22	136
	調整済み残差	0.86	-1.03	0.03	-0.81	1.76 ⁺	-0.44	
Twitter利用 頻度低群	度数	7	37	17	28	28	15	132
	自己隠蔽 %	5.30	28.03	12.88	21.21	21.21	11.36	100
	傾向高群 期待度数	5.95	33.72	16.41	35.71	30.30	9.92	132
	調整済み残差	0.49	0.72	0.17	-1.67 ⁺	-0.53	1.85 ⁺	
	度数	5	67	13	38	35	13	171
	自己隠蔽 %	2.92	39.18	7.60	22.22	20.47	7.60	100
	傾向低群 期待度数	7.71	43.68	21.26	46.25	39.25	12.85	171
	調整済み残差	-1.14	4.67**	-2.19*	-1.62	-0.88	0.05	
合 計	度数	33	187	91	198	168	55	732
	%	4.51	25.55	12.43	27.05	22.95	7.51	100

注: $\chi^2(15) = 40.83, p < .01$ ** $p < .01$, * $p < .05$, ⁺ $p < .10$

「自分以外に関する否定的発言」が有意に多く、「自分以外に関する肯定的発言」が少ないことが示された。また、有意ではないが「自分に関する否定的発言」も多い傾向がみられた。Twitter利用頻度が高く、自己隠蔽傾向が低い群では、有意なカタよりはみられなかったが、「自分に関する中立的報告」が多い傾向が示された。Twitter利用頻度が低く自己隠蔽傾向が高い群でも有意なカタよりはみられなかったが、「自分以外に関する中立的報告」が多く、「自分以外に関する否定的発言」が少ない傾向が示された。一方、Twitter利用頻度が低く自己隠蔽傾向も低い群では、「自分以外に関する肯定的発言」が有意に多く、「自分に関する否定的発言」が有意に少ないことが示された。

考 察

Twitter利用頻度・自己隠蔽傾向・自覚的身体症状の関係

Twitter利用頻度・自己隠蔽傾向・自覚的身体症状それぞれの相関を検討したところ、自己隠蔽傾向が高いほど自覚的身体症状も高いことが明らかになった。これは河野（2000）の結果と一致していた。つまり、自分の否定的、嫌悪的な情報の表現を抑制することが、ストレスを高め、あるいはストレス低減を妨げる結果、健康状態に問題を感じやすくなると考えられる。

一方、これら2変数はどちらもTwitter利用頻度との相関関係がみられず、尾上（2007）とは一致しなかつ

た。その理由としては、尾上（2007）と本研究との調査時期によるSNS普及率の違いが影響していることが考えられる。総務省（2008）によると2007年末のSNS利用者はネットユーザーの数パーセントで、限られた人しか利用していなかった。しかし、ICT総研（2013）によると本研究調査時期である2013年には56.4%に増加していた。大学生だけに限ってみた場合、その割合はさらに大きいと思われる。つまり、本研究の調査時期には大学生の多くがSNSをコミュニケーションツールとして日常的に利用していたと考えられ、結果的に自己隠蔽傾向などの影響は小さくなったのではないかと推測される。

Twitter行動に関する4群間の比較

Twitter利用頻度と自己隠蔽傾向の高低で4群に分け、「攻撃的言動」や「非日常的関与」について比較したところ、自己隠蔽傾向の高低にかかわらず、Twitter利用頻度高群は低群よりも攻撃的言動を行う傾向が高いことが明らかになった。Twitter上では対面場面よりも攻撃的言動を行いやすいため（佐藤ら、2010）、利用頻度が高い人ほど攻撃性を表出し、発散する場としてTwitterを利用していることが考えられる。また、この結果は自己表現や気晴らしの動機と利用頻度との間に相関関係があることを見いだした柏原（2011）とも一致する。さらに、ただカタルシスとしての表現だけではなく、海原（2011）が述べたように、自分の感情を見直し、整理することにも役立っている可能性もある。

一方、Twitter利用頻度にかかわらず、自己隠蔽傾向高群は低群よりも非日常的空間としてのTwitter上で現実生活からの開放感を得る行動を行う傾向が高いことが明らかになった。日常の現実場面では自分の否定的・嫌悪的情報の開示を抑制する人ほど、Twitterを日常とは別の空間であると認識して日常よりも積極的に自己開示することで、日常のストレスを軽減させていると考えられる。金・三友（2011）はTwitter利用が人間関係を深めたり広げたりすることにあまり影響していないことを見いだしたが、むしろ人間関係に影響しないからこそ自由に表現できるという側面があるように思われる。つまり、自己隠蔽傾向が高い人はTwitterをストレスへの対処方法の1つとして利用している可能性が示された。

コミュニケーション内容に関する4群間の比較

3種類のコミュニケーション内容について4群間で比較したところ、4群ともコンサマトリ的コミュニケーションを行うことが多いが、特にTwitter利用頻度が高いほど3種類のどのコミュニケーションも多いことが明らかになった。また、自己隠蔽傾向が高い人の場合、Twitter利用頻度が高いほどコンサマトリ的コミュニケーションを行うことが多いが、自己隠蔽傾向が低い人の場合は、利用頻度が高いほど課題的コミュニケーションや情緒的コミュニケーションを行うことが多い傾向がみられた。

Twitterは140字という字数制限があるので、込み入った説明や深い内容を伝えることが難しい反面、リアルタイム性が高いことが特徴である（津田，2009）。このため、利用者全般において軽いおしゃべりそのものを楽しむような内容が多くなると考えられる。ただ、自己隠蔽傾向が低い人の場合、Twitter上でも比較的自由に自己開示できるので、利用頻度が高い人ほどおしゃべりだけでなく情緒的な交流や問題解決のための情報を得るなど、Twitterをさまざまな用途で利用していると推測される。一方、自己隠蔽傾向が高い人の場合、匿名性が保たれたTwitter上でも自己隠蔽傾向が低い人と同じようには自由に自己開示できないため、利用頻度が高い人でも情緒的な交流まではあまり積極的に行わず、それでも日常場面よりは比較的自由におしゃべりを楽しむことができているのではないかと推測される。

Twitter発言に関する4群間の比較

Twitterでの実際の発言内容について4群間で比較したところ、Twitter利用頻度が高く自己隠蔽傾向も高い群では否定的発言が多く肯定的発言が少ないことが明らかになった。利用頻度が高く、自己隠蔽傾向が低い群では

自分に関する中立的報告が多い傾向がみられた。一方、利用頻度が低く自己隠蔽傾向が高い群では自分以外に関する中立的報告が多く、自分以外に関する否定的発言が少ない傾向が示された。また、利用頻度も自己隠蔽傾向も低い群では自分以外に関する肯定的発言が多く、自分に関する否定的発言が少ないことが明らかになった。

これらの結果から、自己隠蔽傾向が高くTwitterの利用頻度が高い人は、現実ではどちらかという抑制しがちだと思われる否定的な発言をTwitter上では多くしていることになる。やはり、Twitterという非日常的な空間で現実とは違う態度を取り、軽いおしゃべりの範疇ではあっても比較的自由に自己開示することで、ストレスの軽減を図っていることが考えられる。逆に、自己隠蔽傾向が高くて利用頻度が低い人の場合は、Twitterを非日常的空間だと認識してはいるが、むしろ否定的な発言が少なくなり、どちらかという当たり障りのない自分以外の中立的な報告が多く、日常の現実場面と同じ態度を取っていることになる。つまり、自己隠蔽傾向が高い人の中でもTwitterの利用の仕方によって利用頻度が違ってくることが考えられる。

一方、自己隠蔽傾向が低い人の場合はTwitter上でも日常と比較的変わらない態度で自己開示を行っていると思われ、特に利用頻度が高い人ほど一般的なTwitterの利用の仕方に近い結果となったことが推測される。利用頻度が低い人ほど自分以外に関する肯定的発言が多くなった理由はあまり明確ではないが、考えられることとしては、ネット上での関係をあまり求めておらず、むしろ現実の関係を補うためだけに利用している可能性がある。つまり、現実の関係をよりよくするために、よい影響をもたらしやすい肯定的な発言が多くなったのではないかと考えられる。

今後の課題

本研究では、大学生のTwitterの利用頻度や自己隠蔽傾向がTwitter行動やTwitterでの発言内容にどのような影響を及ぼすかについて検討した。その結果、自己隠蔽傾向が高くてTwitterをストレスへの対処の1つとして積極的に利用していると思われる人と、そうした利用をしていない人に分かれた。この違いがTwitterに対する態度や考え方の違いなのか、ストレス対処の方法や考え方の違いなのかについては明らかにできなかった。この点について、新たな変数を加えて検討することが今後の課題である。

また、Twitterでの攻撃的な言動や否定的な発言がストレスへの対処に役立っていたとしても、実際にど

のような意図でなされ、それによってどういう効果を得ているのかについては具体的に検討されていない。この点も今後検討する必要があると思われる。

さらに、本研究では主にTwitterでの発言を検討したが、実際には発言を投稿するだけでなく、特定のユーザーとのやりとりなども頻繁に行われている。こうしたコミュニケーションのより具体的な特徴なども検討していくことが必要であると思われる。

引用文献

- 朝倉隆司 (1991). 働き方と健康習慣・心身の訴え 東京都立労働研究所 (編) 壮年期男子の職業生活と健康に関する調査 労働衛生研究NO.12 東京都立労働研究所 pp.76-83.
- Berson, I. R., Berson, M. J., & Ferron, J. M. (2002). Emerging Risks of Violence in the Digital Age: Lessons for Educators from an Online Study of Adolescent Girls in the United States. *Journal of School Violence*, **1**, 51-71.
- 藤 桂・吉田富二雄 (2009). インターネット上での行動内容が社会性・攻撃性に及ぼす影響—ウェブログ・オンラインゲームの検討より— 社会心理学研究, **25**, 121-132.
- 古谷嘉一郎・坂田桐子 (2006). 対面, 携帯電話, 携帯メールでのコミュニケーションが友人との関係維持に及ぼす効果: コミュニケーションのメディアと内容の適合性に注目して 社会心理学研究, **22**, 72-84.
- 樋口雄太郎・河野義広 (2012). 主要SNS mixi, Twitter, Facebookの利用調査に基づく性質の相違点 2012年社会情報学会 (SSI) 学会大会研究発表論文集, 97-100.
- ICT総研 (2013). 2013年度SNS利用動向に関する調査 ICT総研 2014年6月 <<http://www.ictr.co.jp/report/20130530000039.html>> (2014年11月9日)
- ICT総研 (2014). 2014年度SNS利用動向に関する調査 ICT総研 2014年9月 <<http://www.ictr.co.jp/report/20140821000067.html>> (2014年11月9日)
- 石井健一 (2011). 「強いつながり」と「弱いつながり」のSNS — 個人情報の開示と対人関係の比較 — 情報通信学会誌, **29**, 25-36.
- 柏原 勤 (2011). Twitterの利用動機と利用頻度の関連性 — 「利用と満足」研究アプローチからの検討 — 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, **72**, 89-107.
- 河野和明 (2000). 自己隠蔽尺度 (Self-Concealment Scale)・刺激希求尺度・自覚的身体症状の關係 実験社会心理学研究, **40**, 115-121.
- 金 エリ・三友仁志 (2011). モバイルツイッターがユーザーの係性および社会に与える影響—日韓大学生ユーザーの利用に関する比較— 情報通信学会誌, **29**, 57-70.
- 越河六郎・藤井 亀 (1987). 蓄積的疲労徴候調査 (CFSI) について 労働科学, **63**, 229-246.
- Larson, D. G., & Chastain, R. L. (1990). Self-concealment: Conceptualization, measurement, and health implications. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **9**, 439-455.
- MMD研究所 (2014). SNS/コミュニケーションサービスの利用目的, LINEは「友達との連絡手段」Twitterは「情報収集」Facebookは「近況報告」MMD研究所 2014年7月24日 <https://mmdlabo.jp/investigation/detail_1324.html> (2014年11月9日)
- 尾上恵子 (2007). 女子学生の人間関係構築における諸要因について 一宮女子短期大学紀要, **46**, 15-22.
- 佐藤広英・日比野 桂・吉田富二雄 (2010). CMC (Computer-Mediated Communication) が攻撃性に及ぼす効果 筑波大学心理学研究, **39**, 35-43.
- 総務省 (2008). 平成19年「通信利用動向調査」の結果 総務省 2008年4月18日 <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/080418_1.pdf> (2014年11月9日)
- 総務省 (2011). 共生型ネット社会の実現に向けて 情報通信白書平成23年度版 総務省 2011年8月9日 <<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h23/html/nc213120.html>> (2014年11月9日)
- 津田大介 (2009). Twitter社会論—新たなリアルタイム・ウェブの潮流— 洋泉社
- 海原純子 (2011). Twitter幸福論—ネットワークサイズと日本人— 角川書店

謝 辞

本研究は平成25年度比治山大学現代文化学部卒業生の舩田結生さんに協力いただきました。記して感謝いたします。